



宇宙探査に心を馳せて

昨年2019年は、7月にアポロ11号の月着陸50周年、2月には、宇宙航空研究開発機構（JAXA）の探査機「はやぶさ2」が、地球から約2億4千万キロメートル離れた小惑星「リュウグウ」へ着陸し、宇宙に関わる様々な特集が、マスメディアやソーシャルメディアの話題を賑わした。

アポロ計画の真っ只中に育った筆者にとって、地球上の岩石との違いもわからないまま、ただ「月の石」を一目見るために、EXPO'70（大阪万博）で長い行列に並んだことなど、古い記憶のなかでも鮮明な一幕である。当時は、米ソ冷戦のさなかであり、アポロ計画による宇宙探査から、国家の威信をかけた宇宙開発競争、という発想があっても、生命の起源解明にまで思いを馳せることは少なかったかもしれない。

一方「はやぶさ2」は、計画当初より有機物や水のある小惑星を探査して岩石を回収し、生命誕生の謎を解明するとの目的を課されていた。初代「はやぶさ」からの技術的改良はもとより、めざす小惑星「リュウグウ」が、炭素質を多く含むC型小惑星であり、そのサンプルの分析結果により、生命の起源が小惑星の隕石からもたらされたのではとの仮説の証明に近づくこととなる。このような背景から、本誌読者の中にも、興味をもたれていた方が多くいらっしゃるのではないと思われる。

2月の第1回着陸に続き、7月の第2回着陸では、人工的につくられたクレーター（くぼ地）の近くに降りて、サンプルを採取する様子が放映され、そのリアルな映像に驚

き興奮した。「はやぶさ2」は2014年12月に種子島宇宙センターから打ち上げられてすでに5年余が経過している。プロジェクトに関わってこられた研究者の思いが伝わってくるようであり、今年末に予定されている帰還の無事・成功と「リュウグウ」からのサンプル回収を祈る気持ちである。

このような遠い宇宙で、綿密な計画において実行されるプロジェクトと比べれば、私たちは、地球上にあって、日々有機物に囲まれているという「恵まれた環境」にありながら、生命の本質に迫ることの難しさを感じている。サンプルが身近にありすぎること、迷いが生じて、アプローチも“みちくさ”が多くなっているのかもしれない。

年末に福井県を訪ねた。恐竜発掘で有名な恐竜博物館の地元であり、駅のお土産には、恐竜グッズが並んでいる。その中に恐竜骨格の3Dパズルがあり、面白そうだと購入して組み立ててみた。子供のおもちゃと思っていたが、パズルパーツの中には、よく似た形の骨らしき断片がたくさんあってなかなか難しい。説明書には、「学術的な骨格の再現ではありません。」と注意書きされているものの、完成した骨格標本風の精緻な出来栄に、しばし見とれて太古の恐竜という生命体に親しみを覚えた。恐竜は、地球上での長きにわたる繁栄の後に、隕石衝突で絶滅したとされている。

宇宙探査で沸いた1年の振り返りに、太古に「宇宙からの天災」で滅びた生命を思い、我にかえってみれば、身近にある現地球の生命が愛おしい。その成り立ちを知る研究に、時間の許すかぎり真剣に励み続けたいと思う。

様々な組織や機関からの、意義の感じられない書類の提出に追われることが多い日々、宇宙の成り立ちに思いを巡らせて、要求のはかなさに気づいていただきたいとも感じる今日このごろです。

（ブレアデス）